# 京極 読 書 新 聞 <第39号>

発行日 平成24年 11月 1日(木) 京極町生涯学習センター湧学館

平成24年10月13日(土) 「余市をめぐるバスの旅」

# 余市の古さと新しさ

湧学館司書:新谷保人(あらや やすひと)

数ヶ月前に発表された「北海道新幹線」ルート。そこから外れてしまった余市町。思い出の余市の街をこの目に焼きつけておこうと、10月13日、今年度の「バスの旅」は向かいました。しかし、結果的には、幸田露伴や野口雨情の昔話に頼らなくとも、充分に知的興奮にあふれた、そして、今なお情感あふれる余市の街を発見することができたのです。新幹線ルートから外れたことは、案外、余市の魅力を引き立たせることになるかもしれないとさえ思いました。季節は秋。余市川の鮭の遡上にも出会い、リンゴ・ブドウの収穫期にも重なり、楽しい余市文学散歩の一日でした。



▲よいち水産博物館にて



2~3ページでは、バス旅行の行程を紹介します

#### ▼よいち水産博物館

まずは、余市の「基本」。余市の町が開かれるきっかけとなった江戸時代の松前藩支配。アイヌ政策。明治維新以後、入植に入った会津藩の武士たち。その会津藩士たちが苦闘の上に成功した「緋の衣(ひのころも=リンゴ)」栽培。そのリンゴの存在と余市川の清流は、ニッカウヰスキーの創始者・竹鶴政孝にウィスキー工場の地をここ余市に決めさせます。そして、竹鶴はモルトが熟成するまでの十数年の時間をリンゴジュースの製造でしのいだのです。

裕福な林檎園の子弟からは、薄命の女流詩人「左川ちか(さがわ・ちか)」を生み出します。教育に熱心だった会津藩士の風土からは、彗星のようなアイヌ歌人「違星北斗(いぼし・ほくと)」のような人も生まれてきます。

そして、「市川天涯(いちかわ・てんがい)」。 樺太に思い出を持つ参加者も多い今回の「バスの旅」のために、下見の際の要望を受けて、よいち水産博物館は9月末終了の「市川天涯と樺太」展をそつくりそのまま残しておいてくれました。 本当に感激です。

#### ▼幸田露伴文学碑

からざけ ぎ

「塩鮭の あ幾と風ふく 寒さかな」

#### ▼阿倍比羅夫記念碑

今回のツアー、最大の難所。出雲神社の松尾芭蕉句碑(←急な崖の頂上にある)は早々とあきらめましたが、せめてここだけは頑張ろうと皆で登りました。それくらい、見たかったのです。羊蹄山麓の人たちにとって「後方羊蹄」の読みは「しりべし」に決まっていますが、これを「シリパのヨウチ」と読む世界もあるということは、なかなかにカルチャーショックでした。このシリパ岬に建つ異様な比羅夫碑の解説も含めて、帰りのバスの中で、村山功一氏に「後方羊蹄と比羅夫伝説〈私見〉」という特別講義をいただきました。



#### ▼「市川天涯と樺太」展

8月7日~9月30日

市川天涯は元・小樽新聞(現在の「北海道新聞」の源流)の樺太支局長。樺太時代に撮りためた写真に

は、樺太の庶民生活が活き活きと映し出されています。これは、今までの官製写真や映像には見られなかった特徴です。都市部に集中することもなく、広く樺太全土のさまざまな人たちの素顔を描き出した展示会は評判を呼び、会期中、全道から多くの人がよいち水産博物館を訪れました。



「市川天涯と樺太」展カタログ▲

#### ▼日本最北の芭蕉句碑

「郭公まねくか麦のむら尾花」

#### ▼円山公園

#### ~お食事処「香魚亭」

日本最北限の鮎料理の前に、沢町の円山公園で時間調整。温室に咲き乱れる花々をゆっくり堪能した後、豊丘のリンゴ園やブドウ棚を通って余市川へ。ちなみに、今回のバスツアー、余市の町を、一度として同じ道を使わず一筆書きで町内の名所をまわるルートを意識しています。食後、余市川で遡行してきた鮭の群れを見学。



#### ▼鮎の歌碑

「この郷の川を清みて住む魚の 永久に豊かにあれとぞ願ふ 涯川 |

# ▼吉田観光農園 「りんご発祥之碑」

#### ▼ニッカウヰスキー余市工場

リンゴジュースをつくっていた頃の会社名は「大日本果汁」株式会社。 つまり、「ニッカ」とは「日」「果」だったのですね。 内田康夫のミステリー小説「化生の海」に登場するヒロイン「三井所園子さん」を思わせる案内嬢の名解説とニッカ名酒の試飲に酔いしれました。

### ▼フゴッペ遺跡(第一次)

小樽高商(現在の小樽商科大学)の西田教授とアイヌ歌人・違星北斗による大論争「フゴッペ論争」の、まさにその舞台となった第一次フゴッペ遺跡の地を確認しました。今でもあの「謎のマスク」が土の中に眠っているかのような風景ではありましたが、雨がぱらついてきたので「バスの旅」はここで終了です。一路、帰途へ。

今年の「バスの旅」も大雨注意報が出た日にあたって しまいましたが、結局、私たちは傘も持たず、見たい余市 をすべて見ることができたことは幸運でした。

#### ▼ 冷水トンネルと冷水峠

今年2月に開通した「冷水(ひやみず)トンネル」。余市への往きのバスはこの「冷水トンネル」を使い、帰り道は 旧道にあたる「冷水峠」を通って、新旧の道の景観を楽し みました。



▲ニッカウヰスキー余市工場にて 案内嬢の説明を聞く参加者たち

#### ▼余市文集(「バスの旅」ガイドブック)

竹鶴政孝とリタ(ジェシー・ロベルタ・カウン)の物語は、作家の創作 意欲を刺激するらしく多くの作品が発表されています。「余市文集」 では、森瑤子「望郷」をご推奨しました。

他にもお薦め本がいっぱい。左川ちかの現代詩。違星北斗の グルーブ感あふれる短歌。まさに新しい余市の象徴です。でも、 一番のお薦めは、やはり内田康夫「化生の海」でしょうか。主人公 が余市ニッカ工場の案内嬢。物語が余市川の鮭の遡上風景から 始まる…という、まさに今回の「余市をめぐるバスの旅」のために書 かれたかのような作品ではありました。



# 

#### 《余市文集収録作品》

伊藤整「若い詩人の肖像」/ 北見恂吉「小丘」/ 武井静夫「後志歌人伝」 左川ちか「昆虫」ほか/川崎昇「露店小情」/

小樽新聞 昭和2年11月14日号「神秘を語る古代文字と謎をきざむマスク」 小樽新聞 昭和2年12月19日号「今ぞたつアイヌの歌人 余市の違星北斗君」 違星北斗「志づく」/幸田露伴「突貫紀行」

石川啄木「悲しき思出(野口雨情君の北海道時代)」/森瑤子「望郷」 内田康夫「化生の海」/前田克己「余市の石碑」

※「余市文集」ほか、湧学館作成の資料は「郷土資料」コーナー書架に出しています。 貸出もできますのでご利用ください。

## 余談「平清盛」(10)

#### **<『平家物語』を読む会> 講師 村山 功一**(むらやま・こういち)

〈ドラマ・清盛〉は10月14日の放映で40回を迎えましたが、 第30回を過ぎた頃からやっと『平家物語』に沿った展開になって来ました。少しホッとしています。

第37回は平家の横暴を象徴する、有名な「殿下乗合(てんがののりあい)」(巻一)が描かれます。事件は清盛の孫〔重盛の次男〕の資盛(すけもり)が、外出の帰途摂政藤原基房への礼を失したということで、基房の供侍たちに乱暴されたことに端を発します。

『平家』は、ほうほうのていで六波羅へ逃げ帰った資盛の報告に激怒した清盛が、重盛の意を無視して後日腹心の瀬尾兼康や難波経遠などに命じて、完全武装の武者300騎で基房の行列を襲い、報復したとあります。一方、ドラマでは当時福原に滞在していた清盛が密かに義弟時忠を唆(そそのか)して実行したように描いています。いずれにせよ、清盛が"黒幕"という点では一致しています。

しかし、この事件に関しては『平家』も、ドラマもフィクションです。この報復劇の首謀者は、実は資盛の父で、温厚篤実で思慮深いとされる重盛その人なのです。『愚管抄』には〈〔たいそう立派な人物である重盛が〕父入道に教唆(きょうさ)されたのでもないのに、考えられないようなことを一度だけしている〉とこの事件に触れています。同様の記事が『玉葉』『百錬抄』にもあるということなので、史実と思われます。『平家』は清盛"悪玉"、重盛"善玉"という構図で描くため、清盛に罪を着せたのでしょう。何とも気の毒なことです。また、ドラマの方は当時清盛は福原に滞在していたという史実に基づいていますが、"新しい国づくり"に邁進するヒーローである清盛を露骨に"悪玉"にする訳にもいかず、何かと勇み足の多い時忠を前面に出す形をとったのではないでしょうか。

まさに"飛ぶ鳥落とす"勢いの清盛が、次に打った手は皇室 (ドラマでは「王家」としていますが、あまりなじめません)と親戚 関係を結ぶことでした。その手段として娘を入内(1)させます。 やがて清盛の目論見どおり彼女は皇子(のち安徳天皇)を産 み、清盛は天皇の外祖父という絶大な権力を手中にします。ド ラマではまだ(第40回時点)皇子誕生に至っていませんが、今 後だいたいこのような展開になると思います。

ところで、清盛の娘の名前は"平徳子"であることは間違いな いのですが、ドラマではたとえば清盛が11歳の彼女に向かって 〈おお、トクコか……〉とか、あるいは自邸で琴の稽古の際などに 母時子が〈これ、トクコ……〉などと呼びかける場面が出てきまし た。でも、これはありえません。"徳子"という名前は、入内に際 し式部太夫藤原永範によって名付けられたものです(『兵範記』 による)。その後、後白河院の養子となりめでたく高倉天皇の妃 になります。この時、徳子17歳、高倉帝11歳と伝えられていま す。したがって、正式に入内が決まるまで、つまり1歳から17歳 の12月(2)までの間に、"徳子"と呼ばれることはありえないわ けなのです。そして実は、1歳から17歳までの彼女の名前は分 かりません。少なくとも徳子ではありません。だから清盛や時子 が幼い娘に〈……トクコよ〉と呼びかけることはできないのです。 さらに、"徳子"は果たして"トクコ"と読むのかどうかという悩まし い問題もあります。近年、"ノリコ"説が有力になってきましたが、 一般的にはまだ"トクコ"が根強いようです。しかし、現在もその 読み方は確定していません。

『平家』の女性の中で最も悲劇的な運命を辿る建礼門院徳子は、『平家』を学ぶ者にとって重要かつ魅力的な人物ですが、その名前に関してもちょっとミステリアスなのです。

[以下次号]

#### 《注》

(1)入内(じゅだい)……皇后・中宮・女御などに決まった女性が、正式な儀式を経て内裏に入ること。

(2) 12月……承安元(1171)年12月2日、平 清盛の娘、後白河院猶(養)子として入内(『愚管抄』 『玉葉』などによる)。

#### 《参考》

『兵範記』……平信範の日記

『百錬(練)抄』……歴史書·編者不明

『玉葉』……九条兼実の日記 『愚管抄』……慈円による通史

#### 発行

京極町生涯学習センター湧学館 〒044-0101 京町字京極158番地1 TEL 0136-42-2700(代表) FAX 0136-42-2032 E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください http://lib-kyogoku.cubet.com/

